義太夫協会々報
第１９号
昭和５４年10年11日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
8－14－3　松本ビル
ＴＥＬ（５４１）５４７１

冠婚葬祭と義太夫節

会長　吉川英史

音曲の司といわれた義太夫が、邦楽界の斜陽族になった原因に、日常生活との関係もあるのではないでしょうか。義太夫は数少ない舞台においてだけ、あるいは義太夫を教える師匠の所でだけしか聞けないという状態では、一般人から義太夫が離れるのは当然かも知れません。

同じく舞台芸術である能楽が、今も庶民の間に生きているのは、江戸時代に謡(うたい)が独立して、能は武家の独占でありましたが、謡は町人にも許され、その上、結婚式、新築落成式その他の冠婚葬祭に謡われて、生活と密着していたことが、一つの原因かと思われます。そのことは、「高砂や」という落語があることでもわかります。

ところで、謡曲の方では、小謡といって、曲の中の定められた一節があって、追善、祝言（祝賀）などの場所柄のほか、春・秋などの季節を考慮した上、不吉な文句のあるものは避けてうたわないか、あるいは臨時に文句を変えることになっています。婚礼には、「さる」「かえる」「かえす」などの文句を嫌うのは無論ですが、本来は繰返す節も、「返す」ということを嫌って、一度しかうたいません。

追善のためには、「葵上(あおいのうえ)」の中から「菩薩もここに来迎(らいごう)す」の所、「石橋」から「向は文殊(もんじゅ)の浄土にて」の所などをうたいます。

文句を変える良い例としては、「鉢ノ木」の「松はもとより煙(けむり)にて、薪(たきぎ)となるもことわりや」を、江戸時代に、松平氏の松に遠慮して、「松はもとより常盤(ときわ)にて、薪となるは梅桜」と改めた例がある。（その席に梅田氏や桜木氏がいては困りますが…。）

ところで、義太夫の方では「三番叟」の抜粋演奏があるくらいで、冠婚葬祭の曲は余り聞きません。二代目豊沢松太郎師が「長生殿」と「御祝儀高砂、尉と姥」を作曲され、また「追悼曲」として「なむあみだぶつ」で始まる小曲を作曲されたことに対し、私は敬意を表します。しかし、もっといろいろな新作ができて、時と場合によって選べることが望ましいと思います。しかも、①歌詞は一般に広く使える曲、②むずかしい技巧のない曲、③一人でも多人数でも演奏できる曲、④5分でも10分でも伸縮のできる曲が望ましいのです。

右の新作小曲のうち、めでたい曲は、手ほどきにも使えますが、手ほどき曲については、別の機会に申し述べることにしましょう。

義太夫協会報　第19号
1979、10、11

会員みなさまへ

副会長　豊沢仙広

選挙・選挙と何事も国民幸福の為に努力して居られると信じて協力しておりますが、如何に思いをはせても手の届くところではなく、芸術を以って一人一人の人間造りをすれば、幾分でも日本の為になると信じて、忠と孝・義理と人情の近松文学・義太夫に浮き身をやつしている、義太夫協会の幸福をつくづく感謝しております。義太夫協会の人員も日一日と多くなりました。やがて皆様に喜んで頂ける協会になると確信して役員一同努力致しております。

新橋演舞場新築出来上るまでの仮事務所が、十月から決まりましたので一同ほっとしているところです。それまでの一ヶ月半、長唄協会のお世話になりましたが、その御親切に厚く御礼申し上げる次第です。会員の皆様に御迷惑のかからぬようにと、事務局の努力は大変な事であったと正会員一同感謝致しております。

月例の本牧亭公演に何か目新しい企画をと、過日の理事会に色々と話は出ましたが、さて、なかなかすっきりした企画がまとまりません。義太夫愛好者が毎月二十日・二十一日の本牧亭公演には是非行きたいと思われるような良きアイデア、賛助会員皆様の良い企画・お智恵をお借り致したく、何卒忌憚のない御意見をお寄せ下さるようお待ち申し上げております。この義太夫協会を大阪の文楽協会のような規模にしたい、又なりたいと思う心・命がけで努力している私の願いは必ず無駄にはならぬと信じているのです。然し、義太夫愛好者皆様の御支援なくして、この大願成就することは出来ないと存じます。皆様の大なる御支援を頂けば立派な義太夫協会になると存じます。

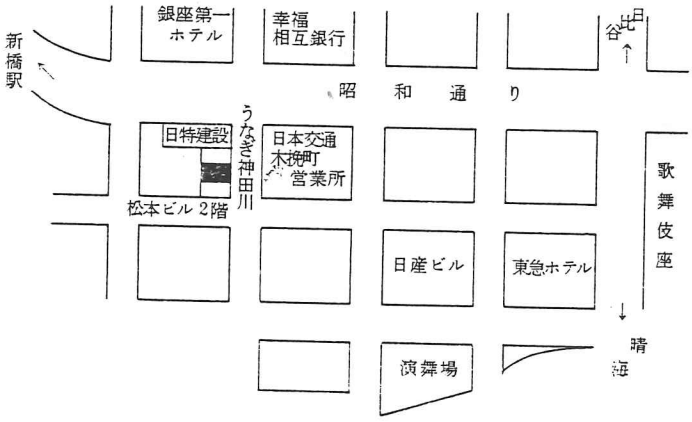
どうぞよろしく御後援・お引立てを賜りますよう伏してお願い申し上げる次第でございます。

皆様の御健康をお祈り申し上げます。

義太夫協会 事務所移転のお知らせ

かねて会員皆様御存知の如く、新橋演舞場改築に伴い、左記へ移転致しました。

演舞場の新築再開は、昭和五十六年秋の予定ですので、二年余はございます。前の事務所の二・三分先ですので、近く迄いらした時はお立寄り下さいますよう御案内申上げます。



新住所
〒104　中央区銀座8－14－3
（松本ビル）
電話　（541）5471（従来通り）
地下鉄 東銀座下車6分

特集 義太夫教室

〈義太夫教室〉所感

景山正隆

昨年度につづいて、本年度も、私は、おこがましくも〈教室〉の講師を勤めさせていただいた。かねがね受講したいと思いながら機会を得なかった身であったのが、一足飛びに、吉川先生の領域を侵して、義太夫節の歴史や特色・魅力について、お話をする側に立たされてしまったのである。

受講者の方々に、私の拙い話が、はたしてお役に立ったかどうか、甚だ心もとない限りであるが、私自身にとって、義太夫節について考え、認識を深めていく上に絶好の機会となったことだけは確かである。こんなことを言うのは、受講者の方々にはまことに失礼なことであるが、本当のところがそうなのだからおゆるし願いたい。私の担当した時間はわずか数回であったが、そのための準備にかけた時間の方がはるかに上回っている。これが私にとっては大変勉強になったのである。

逆に、受講者の方々は、おそらく私の話はきわめて舌足らずなものと受けとめられたであろうし、又、週二回、わずか二か月間の講習は、あっという間に過ぎて、物足らなさを覚えた方が多いのではないだろうか。このように勝手な想像をするほど、皆さんが、それぞれ立場は違っても、〈義太夫〉に対しては深い関心と愛着をもっておられるように見受けられ、それが大変嬉しかったのである。〈教室〉の目的は、多くの方々に、義太夫節への関心と認識を深めていただくための〈誘い水〉のような役割りを果たすところにあるのかも知れない。三十年の歩みはその役割りを十分果たしてきたことを物語ってもいる。けれども、二年度にわたり講師を勤めさせていただいて、せめて三か月の期間はほしいような気がしたことも否めない。

目下私は、ある出版社が刊行を予定している『音楽事典』の〈義太夫節〉という項目の原稿をまとめるのに四苦八苦している。草稿は出来ているが、限られた紙数に対して、書かなければならないことがあまりにも多いからである。三百年の歴史をもつ、義太夫節の無類の特色・魅力は、多くの語りものの三味線音楽の中でも、ひときわ言葉に尽せないものがあるように思われる。演舞場の改築で従来の教室の場がなくなったが、さらによい場所を得て、さらに充実した〈教室〉が、来年度以降も続けられることを期してやまない。

（清泉女子大学教授・協会相談役）

受講生アンケートより

文化庁助成による義太夫教室、第三十二期生のアンケートのうち、今後の参考となりそうないくつかを抜粋してみました。皆さまの御意見・御感想をおきかせ頂ければ幸いです。

受講生は、初級講習会終了後、語りコースと三味線コースに分れ、実技実習を継続しています。指導―竹本駒竜・竹本素八・竹本弥乃太夫ほか、会場―演舞場向い須川

☆　☆　☆

なんとなしに好きで聴いていた義太夫。印刷物につられて軽い気持で申し込みましたが、実技があるとうかがいひどく緊張し心配になりました。案の定、テープを何度も聴き、ほんの少しは見当がつきましたが、いざとなると思うように声が出ません。特に三味線の場合は全くお手あげの状態でした。左手と右手を同時にしかも微妙に動かして音を出すことは、大変難しく泣きたい程でした。先生方の熱心なご指導にもかかわらず、とうとう私は正しく弾けませんでした。たっぷり冷汗をかきましたが、うまれて初めて三味線をもつという貴重な経験をしました。この期間は修業と思い、痛さをこらえて座り続け、心身の訓練にと心がけました。時には必要と思います。お蔭様で、どうにかこうにかゴールまでたどりつけました。先生方、おせわ下さった皆様に感謝しております。

☆　☆　☆

最後の吉川先生の講義のように、テープ等を利用して、聞き比べをするのは、非常に参考になるので充実してほしい。

☆　☆　☆

景山先生の講座が今回の倍くらいあれば良かったと思います。特に、後半の音を交えての鑑賞は大変参考になりました。実技の方はとても理解出来たとはいい難いのですけれど、例えば三味線のオクリ、ただあの短い音を出すのに苦労したことを思えば、舞台を観る（聴く）時、それが去来します。

☆　☆　☆

語りも三味線も思っていた以上に難かしく、なかなかついていくことができませんでしたけれど、自分でやることの難しさがわかっただけでも良かったと思っています。

☆　☆　☆

実は、私は今まで義太夫については何も知らなかったと言ってもいいくらいで、文楽もテレビでしか見た事がありません。でも歌舞伎が好きですので、義太夫のことを少しでも知ることができれば、歌舞伎も今まで以上に楽しく見れるようになるのでは？という単純な理由からこの教室に入ったのですが、今では義太夫というものにすっかり夢中になってしまいました。実習はもちろんですが、講義の方も、もっと延長してほしいナーと思っているのですが……。

☆　☆　☆

大変綿密に計画がたてられてあって感心した。講師の方々も丁寧に教えて下さり為になったが、三味線の実習をもっとやりたかった。

☆　☆　☆

ごくごく初歩的なことを質問できる時間や場を設けていただけましたら（教室が始まる前などに）大変有難かったと思います。

☆　☆　☆

短期間の、しかも初心者向けの講習だからということもあるとは思います。が、それにしてもあんなに一流の先生方がおいでになるのにもったいないという感じの講義だと思います。広く浅くも大切ですが、その中にも深く掘り下げる講義テーマの選び方をすれば、よりよくなると思います。

☆　☆　☆

短期間ですから多くを望むのは無理なことですが、できれば実習する各曲についての検討（曲を理解し、語り方を考える、討論する）の時間などもあればよかったと思いました…その点、重造師の御指導はすばらしかったと思います。講義については、一部に準備不足の感を持ちました。僅かな時間しかないのですから、講師の先生には十分の準備、講義計画をお願いしたく存じます。

☆　☆　☆

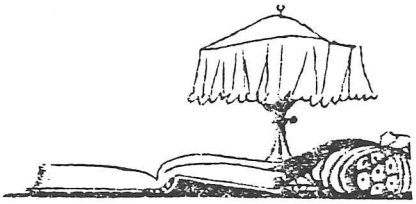
原則的には、講義、実習が半分半分という構成には賛成です。しかし、今回の教室で講義としてありましたことは、比較的、本でも勉強できることなので少々圧縮し、（例えば、資料を示して読んでおくようにということにし）、例えば「音調基本」などを戴いた資料に則って、先生が三味線を弾きながら講義するような方法で構成してはどうでしょうか。

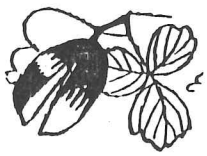
☆　☆　☆

とりわけ印象的だったのは重造師の講義でしたが、それは内容から入って行ったからだと思います。西洋音楽に慣れた我々にとって日本音楽の音をとるだけでも大変だと解って収穫でした。名人レコード鑑賞も良かったがもっとたっぷり時間があったらと思いました。

☆　☆　☆

実習は、各先生さまざまでしたが、重造師のことば一つ一つがとても心に深く残りました。教室を経た者か、今後、個人としてどう義太夫をたのしんでいけるが、それには真新しい経験だけではなく、一つの感銘にあると思いますが。





教室今昔

竹本弥乃太夫

近来、文楽や歌舞伎も若い観客が多くなり、それなりに古典芸能に関心を示していることは、大変喜ばしい限りである。一時代前の、閑古鳥がなくほどの文楽興行の入りを思うと、全く今昔の感一入である。戦後、焦土と化した東京がやっと復興のきざしを見せ始めた。テレビや映画でも、戦後の日本の姿が再現されるが、その画面の通り、進駐軍のジープが走り、ガムを噛みながら、日本の女性と肩をよせ合って歩くアメリカGIの姿が、闇市や、銀座のPXの周りに目立っていた。そして浮浪者、靴みがき、リンゴの唄、等々。今の平和な、満ち足りた食生活や経済成長の発展著しい日本の今日の姿からは、誠に隔世の感がある。―その頃、浅草の神谷バーの隣りの、今はない東京亭で『女義復活』の立看板が出た。浅草育ちの私は、戦前の並木倶楽部や六区の義太夫座へは、子供の頃から親に連れられて、義太夫を聴いていたから、女義の看板はとてもなつかしかった。路地の張紙には、たしか鶴沢清一さんや竹本重之助さんの名前があったように記憶している。それと前後して、素義の会もあちこちで復活した。神田神保町に一心倶楽部という小さな席があった。勤めの時間をやりくりして、つとめて義太夫を聴きに行った。義太夫に飢えていた頃だから、演者の誰もが、皆上手いと思った。後にきいたら、旧五十義会の三役クラスの人ばかりだった。復員して間もなくの頃だが、当時としては、私の年配で義太夫が好きなのを不審に思って、亡くなった坂本あるを氏が、君は若いのに珍しいと、目を輝かして言った。それがきっかけで、幸か不幸か、私をして義太夫を本業として志す身にさせてしまった。現在の教室の人が、義太夫教室開講の一枚のちらしが、『私の人生を狂わしてしまったのよ』と嘆くが、人生なんか分らないものである。

銀座の松屋が当時PX、その裏に川が流れていた。現在の三原橋の下の川で、それは皇居の外堀に当る。メタンガスが発生して汚い川であった。その川に面して、朝日倶楽部があった。昭和二十三年六月十五日の事である。障子をあけると、臭い川の匂いが鼻をつく、その奥座敷で、第一回の義太夫教室の開講式が行われた。生徒はたった五人である。一般に公募したわけでなく、一人一人知人を介して入会させた。文楽の鶴沢綱造師、劇評家の三宅周太郎氏、安藤鶴夫氏、近松研究家の高野正巳氏、コロンビアの森垣二郎氏、演出家の川口子太郎氏等壮々たる陣容だった。世話人坂本あるを氏は後に豊竹湊太夫を襲いだ。講議の野沢吉二郎師は、斯界の近松研究者であり革命家でもあった。実技の猿幸、三生両師は、まだ若く華やかな時代であった。生徒数より関係者が多くスタートした第一回の教室から、足掛け三十二年を経過している。過去一万枚のちらしをまいても生徒数ゼロ、何年ものブランクを続けて、やがて旧因協会が現協会となり、社団法人となって義太夫教室の再開を試みたら、長い間氷に閉ざされた地中の花が芽を吹き始めたように、どっと若い人達が応募した。以来女性のブロも何人か誕生した。併し乍ら女性は、結婚出産育児教育と一定のコースが定められているようで、それを乗越えて芸に精進することは並大低の事ではないと同情する。芸と家庭、私にはまだカウンセラーとしての力はなさそうだ。今また新しい星が誕生しようとしている。若い人達の古典へのあこがれのようなものが、小さなブームを作っていると昨今言われている。矢張り古典のよさと伝統の根強さがそれを支えているのであろう。だからと言って喜んでばかりいられない、諸事難関を克服して、若い人達が芸に一層の精進が出来るように、此れからの協会はその時代に即した体質の改善を施さねばならないと痛切に感じる。古典の華が一勢に咲乱れるようになるのはいつの頃だろうか、義太夫教室の発展を希ってやまない。

義太夫上達法の内

名人上手となる秘訣

河野国声

芸術の中に義太夫ほど面白いものはありません、それはなぜでしょう。人間が生きた人間を描き出そうとする大芸術だからです。人間の心を人間の心で描いてみる面白さ、それができそうであるだけに、つい上手も下手もなく夢中にもなれるし、気ちがいにもなれるが、また天狗にもなれるだけに、病みついたら死ぬまで離れられない心病ともなるほどのものなのです。そして、それが幸か不幸かといえば、それはその人次第だといえるので、他人の干渉すべき問題ではないのです。

私は、生れない前から、義という名が用意されてあって、生れたら義太夫の太夫となるように宿命づけられていたかのような人間だったらしいのです。父の第二夫人が土佐という字をもつ義太夫の師匠で、小土佐師匠と同年輩の人であったようなのです。後年それとも知らずに、その倅が小土佐師と親交があったというのも、奇しきご縁だったかもしれません。私は五歳くらいのとき酒屋のさわりなどを語って、人にほめられたことを覚えております。ところが父は、私を義太夫語りにしようと義という名を用意したのではなく、八犬伝の剣士のような勝れた士にしようと志して、長男は仁、二男は義、三男は礼、四男は智、五男は信と、子供のできぬうちから名を決めていた義だったのです。女の子なら義子とでもしたのでしょうが、義でヨシノリと読みます。

私の兄弟は計画通り五人生まれましたが、今は皆死んで私一人、八十二歳まで元気で生き残って居ります。私はそういう因縁のうちに生れ、且つ生きて来たので、義太夫には天才ではなくて先才という先天性の才能があったから、其の間ろくな稽古もせずに、ごまかし上手に、独断的理解と工夫で、けっこう一生涯を楽しんで居る次第なのです。何かごまかしかと言えば、私ほど義太夫に忠実な男はありませんが、自分の天狗や気ちがいになるのがこわいから、自分をごまかして、義熱の人とならずに居るわけなのです。熱を出さず、天狗病にならずに、このむずかしい義太夫をこなしてゆく秘訣には、義太夫は心で語らずに、体で語るという要領が必要で、この意味がわかれば、声も自由にでるし、義太夫も思うように語れるようになるのです。世の中の義太夫語りは玄素の別なく、大ていの人が、心で芸にとらわれ、心で工夫し、心で熱中して居りますが、人間の心で人間の心や情景、味は語れるものではありません。芸術と心は相性がよさそうで大敵役、心無しに体で語れれば早く一人前に成れます。

私はそうした芸術の本義、理法に気づいたため、大正十年頃の素義流行時代に、毎月十回以上も、東京中を語り歩いた狂人振りを、大震災の日からぷっつりやめて、その勢力を事業の方に向けて、小さいながら人生の社会戦争に勝利を収めることができたのです。

義が義太夫狂に勝って、一生涯義太夫振興に賛助できるのは、心が義熱病に罹らず、冷静に義太夫を愛し続けたからだと思います。二十七歳の頃、古靱レコードで何段もの古靱流をおぼえ、日東レコードの森下社長邸で古靱師に聞いて貰ったあと、文楽に入りませんかと強くすすめられたが、義太夫語りでは妻子が養えぬからと断ったお蔭で、後年永く古靱師のお世話もできた思い出もあります。

その頃野辺地山石や、金川文楽等、素義から文楽入りを志して、失敗したものです。一時床語りをした鏡太夫君なども、何回も私にこぼし話をした文楽座、芸界の内幕だったのです。私と義太夫の因縁話、思い出は山ほどあるが、素義で客観論評が自由勝手にできる、これがよかったのだと思います。

○

本格の義太夫を人類世界に残したい、日本の文楽を奨励、応援して、世界に魂の叫びをする真の人間芸術を作り上げたいという私の念願には、大きな原理的理由があるのです。

元来宇宙天地間の一切万物は、悉くがみな天然自然の芸術品のみなのです。形も色も動きも音声も、臭いも味もみな楽しいものばかりで、その王様、万能選手が人間なのです。

人間の表現力がみな芸術で実は人間そのものが、そのまま真善美楽という、宇宙性の大芸術品なのです。そのご本尊、ご本質体の人間さまが、芸術芸能をなさるのですから、うまく上手になり、名人にもなれるのです。

さて、そこで百人が百人、みな名人達人となる方法が有るのですが、人は知らぬのです。これが芸道上達の秘訣、人間完成、成功への要領なのですが、人間はみなその原理と方法を知らずに、寧ろ反対のことばかりをやって天狗や気ちがいになってしまうのです。

昔から芸道の心得に、初心を忘るなという言葉がありますが、ほんとうの意味は、素心でやれ、純真の心、まじめ真心、忠実真剣、決して自己を出してはならぬということです。

こんな簡単なことが人間にはむずかしいので、みな誰もが自分が一ぱい。それだからこそ義太夫は流行し、またすたれもするのです。心と人間の関係、それがそのまま人間の運命にも、社会や国の盛衰にも及ぶので、人間と心との関係ほど、恐ろしいものはありません。

○

そこで一足とびに、奥伝秘訣、芸道上達法の免許皆伝の義をお伝え申し上げますが、それは、人間の心的意識を用いずに、体で聞き肉体に覚え込ませて、全身全霊で語ってみよということです。

皆様の耳に残っている近世の名人上手を例に取って言えば、古靱大夫の恵まれた条件、声も理解も、体も人柄も、義太夫まん向きの条件者でしたが、時に先代の津大夫に食われるようなこともあった、というのは、津大夫が〝体いっぱいで〟語り感銘を与えたからにほかなりません。体力の恐しさ、素晴しさを感じたものです。そこへ土佐大夫が加わると、これまた絶品の語りものがあったなど、芸道の規準や比較の種はどこに取ろうかと、誰もが迷うのですが、十人十色、好きぶすき、見物はそれでもよいが、芸術者本人はそんな言い訳けでは、上達はできません。先代の津大夫の沼津のテープが私の手許に有りますから、同一物を五巻ほど義太夫協会へお届け致しましょう。これを自由に貸し出して、玄素どなたにも聞いて貰って下さい。先代の津大夫は難声の人と、誰もが思い込んでいましたが、それは大間違いなのです。あの難声らしき声をあんなに、自由に美しく妙声としたのは、先代津大夫の肉体的努力のいたすところです。これこそ名人なのです。

それほどにも人間の肉体というものは万能選手で、巧妙至極の、芸術の本地、本質的の万能役者なのです。

私が今回言わんとするところは、結論的に言えば、義太夫のお稽古は、すべて肉体で聞き、肉体に覚え込ませ、肉体の全力で語って、決して心や自己の意識を出してはならぬということなのです。

古靱は古靱の声と理性と、器用さで語ったから何を語っても古靱らしい義太夫になって上手ではあるが、平作になり切れず、与次郎や三五郎の馬鹿や阿呆になり切れなかったという所が禍するところであったのです。どう書いたらこの要領がわかって頂けるか、大ていの方にはわかって戴けないかもしれませんが、実はこれほど簡単な秘訣はないのです。

○

人間は肉体をもって生れ、肉体の力で一生涯を生かされ、生きているのに、その肉体の価値や恩恵や、働きを知らずに、一切万事を、心という自己性の意識でやっているから、肉体は本質本領を発揮しようがないのです。本来の肉体で芸術するか、愚かで不まじめで、ごまかし怠ける心で芸術をもて遊ぶか、真剣にか、道らくにか、そこが下手と上手の分れ目であり、人間の成功不成功、幸か不幸かの分岐点なのですから、心を捨てて下さい。その心が捨て切れるようなら、人間は苦労しないよというでしょう、その通りです。義太夫上達法は人間完成法で、幸福への秘訣です。義太夫趣味を上手に生かして、健康長寿の幸福者となろうではありませんか。

〈寄贈〉

高野　俊雄様　義太夫協会会員名簿'79年版　八百部

河野　国声様　テープ（太十他）　三本

歌舞伎の義太夫＝竹本連中の
後継者養成事業

竹本講習について（六）

現在竹本講習は第三期生と第四期生とが併行して実施されています。第三期生は、昨年来の赤坂君（竹本九太夫）・林君（竹本隼太夫）・街君（鶴沢久次郎）の三名に、この春柳瀬君（竹本葵太夫）・野沢松也君が加わり五名になりました。柳瀬君は越道師の許で二年間修業していた、今春高校を出た18歳の逸材です。松也君は御存知の方も多いと思いますが、文楽研修第一期生で故松之輔師門下だった人、この度び竹本の三味線として頑張ってくれることになりました。

本年の歌舞伎公演は義太夫ものが重なることが多く、三期生はあちこちで引っぱりだこの状態になりました。先ず、七月の国立劇場公演の「五段目」に葵太夫・松也。同じ七月の歌舞伎座公演の「吃又」ツレ弾に久次郎。八月四・五日の「歌舞伎会」で「青柳碩」に松也。「五条橋」で葵太夫・九太夫・隼太夫・松也・久次郎。「紅葉符」で葵太夫。

八月二十六・二十七日の「稚魚の会」で「五段目」を隼太夫・九太夫・久次郎。「六段目」を葵太夫・松也。九月は明治座公演「江島団十郎」に松也。地方巡業の「七段目」に九太夫。そして十月は、名古屋御園座公演の「沼津」・「四の切」・「八段目」等に松也。九州巡業の「源太勘当」・「吃又」に葵太夫・久次郎、となっています。十一月・十二月は未定ですが、やはり何人かは出演しなければならないでしょう。これに一期生の清太夫・国太夫、二期生の鶴沢賢治の三君もフルに働いているので、もしもこの人達がいなかったらと考えると、一寸肌寒くなってきます。改めて〝竹本講習〟の成否を問う必要はないと思いますが、短時日の間に実戦に役立つ人を何人か創った、ということはこの業界では画期的といえます。でも将来の設計としてみると、まだ絶対数には足りません。特に三味線にそのことが言えますので、今後の課題となるでしょう。

さて四期生ですが、去る五月十七日に選考試験が行われ、合格三名、うち一人が一ヶ月後に脱落し、現在は太夫志望の高安勝三君（28歳）・三味線の門井泰彦君（22歳）の二人が基礎教育を受けています。二人共素質もあり、又仲々熱心でもあることから、八月二十二日に行われた中間適性審査では良好な成績でパスをしました。今後の二人の健闘を祈りたいと思います。

毎度のお願いですが、若い方でプロの太夫・三味線になってみたい方・お知合いにそのような心当りが御座いましたら、協会迄御連絡下さいませ。

甲州増富にて

五十四年晩秋

谷川

谷川に枯紅葉のせごうごうと
武士（もののふ）等　癒えし湯けぶりの里。
一つゆきて心安める谷川の
清きながれに、又一つ朽ち葉。
病みし葉を沈めて流る谷川に
逆いてゆく、キャラバンシューズ。

友達　その一

湯けぶりの中にたのしき媼等の
はなしに酔いて心温む。
苦を経りし媼等はたのし声高に
背向けて聞かす唄になぐさむ。
裸とは、捨つるものなしと説く老婆
湯の面（も）に浮ぶ強（こわ）き手のしわ。
清き水も豊かにあれば魚の住むと
里のなまりの静かなる老婆。
人に病みし人をなぐさむ媼等は
湯舟の中の、人、人、人。

友達　その二

山道のかどかどにて待ちぬ野良犬は
きつねに似たり、優しき母犬。
かどかどに止（とど）まりて我を待つ犬に、
声高くしてその名前聞く。
弁当の残らぬを詫びし我と知るも
なお先達の犬のやせたる。
里近く、消えし姿によびかくる
幼き頃に飼いし犬の名
「山頂は明らかに遠く、青き空は
今この我と　続きて　たしか」　吉三

協会の動き

昭和54年6月より
昭和54年10月まで

6月20・21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
6月25日　義太夫協会会員名簿'79発行（協会相談役・高野俊雄氏寄贈による）
7月3日　邦楽連合会　於新橋会館
7月7日　女流若手勉強会に関する公演部会、企画担当理事・事務局の他、若手正会員が多数参加した。　於南海芸団協厚生福祉委員会　於芸団協会議室
7月18日
7月20日　文化庁助成・教師のための義太夫節研修会　吉川会長・綾太夫理事の解説および〝新口〟〝柳〟八王子車人形・西川古柳一座賛助出演による〝日高川〟を演奏。国語科、音楽科の教師が多数参加した。於本牧亭
7月21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
7月24日　邦楽実演家団体連絡会議　於芸団協会議室
7月24日　義太夫教室第32期　初級講習会閉講式。皆勤賞・精勤賞授与を行う。俳優協会稽古場での義太夫教室もこの日で最後となった。26名卒業
8月16日　事務所移転。新橋演舞場改築工事に伴い、事務局は長唄協会に一時移転、荷物は新小松従業員寮に運ぶ。
8月20・21日　女流若手盛夏勉強会　昨年にひき続き、若手とベテランの組合せ、掛合等を行う。　於本牧亭
8月31日　義太夫教室三味線実習打合せ会　於須川
9月6日　義太夫教室語り実技実習始まる　講師・駒竜・素八他　於須川
9月7日　義太夫教室三味線実技実習始まる　講師・弥乃太夫他　於須川
9月12日　定例理事会　於新小松
9月20・21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
9月28日　第五期歌舞伎俳優研修生・第三回竹本講習生第二回試演会　於国立劇場小劇場
10月2日　事務所移転完了。（新事務所については2頁に詳報）
10月　日　会報第19号発行

〔曲節メモ〕5

『冷泉』（レイゼイが正しい）上品で優美な曲節で江戸は江戸冷泉、上方は本冷泉、普通は本冷泉を言う。手紙を書いたり、笛を吹いたり、本を読んだり、髪をなでつけたり、焼香をしたり、長くて無言の動作をするところに使われる。逆を返せば、元来長い曲節だから、長い動作の時は此の曲節が適切であるとも言える。又長い曲節に文章を合せる為、ひびき仮名が用いられる。浄るり最初の曲とされる「十二段草子」の〈さてもひさしの冷泉やという句につけられた節廻しに基くと伝えられる。寛永頃六字南無右衛門の語り物で、十二段の続編「下り八島」に義経が矢矧の宿で、浄るり御前の侍女の冷泉に再会するところにある。竹本播磨少掾は初代竹本義太夫の弟子で西風を確立した人、その子の播磨屋長右ェ門が口伝としてまとめた音曲口伝書にみられる。そこには扨もやさしとあり、浄るり物語の後日譚で、牛若丸が慕れ死にした浄るり姫の墓を弔うと五輪が砕ける「五輪くだき」の箇所にもやさしの該当文があるという。江戸時代はひさしの冷泉と非常にもてはやされたといわれる。ひさしかやさしかは不明である。例（玉三）〈用意の褥四隅には立つる桜の一本も

☆ひびき仮名＝字足らずで、音の長さに合せる為と耳障りをよくする、柔らかい感触を与える等の為に、語尾の母音がアで終る場合はンナ、イはインニ、ウはウンヌ以下ンにナ行をはめる。文章に明確さを欠くといって使用しない人もある。例、涙にくれいたるンア。（弥）

新入会員御紹介（敬称略）

特別会員

[redacted]

住所変更

正会員

[redacted]

訃報

■福川弥生氏（賛助会員）53年9月4日逝去
■石川須美氏（準賛助会員）54年2月18日逝去
■竹田恒男氏（賛助会員）54年5月29日逝去
■豊竹誉太夫師（正会員・北米文楽）54年8月18日逝去
■松尾田鷺氏（参与・特別会員松尾武市氏御母堂）54年8月23日逝去
■増田伊年子氏（相談役・特別会員）54年8月27日逝去
■竹本君太夫師（正会員）54年9月5日逝去

[redacted]

会員名簿('79)　正誤表

下記のとおり訂正いたします。御迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

頁	誤 → 正
7、53	[redacted]
15	
26	
27	
36	
36	
44	
59	

編集後記

二度目の引越しと会報編集が重なって、いささか参りましたが、ようやく新事務所に落ち着きました。いまどき珍しく、天井に明りとりのある小じんまりした一室、クリーンヒーター、クーラーつきで快適な二年間がおくれそうです。各方面の御協力、ほんとうに有難うございました。